

國學院大學学術情報リポジトリ

万葉集神事語辞典

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辰巳, 正明, 城崎, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001770

『万葉神事語辞典』

辰巳正明・城崎陽子

1. はじめに

平成 17 年度から國學院大學日本文化研究所（現・研究開発推進機構）の兼担プロジェクトとして3カ年計画ではじまった「万葉集における神事語彙の基礎的研究」（代表・辰巳正明）の成果として、『万葉集神事語辞典』が完成した。

本プロジェクトは、昭和 10 年代に隆盛した国威高揚を旨とする『万葉集』研究の再検討として研究史上位置づけられる。久松潜一・志田延義両氏によって刊行された『古代詩歌に於ける神の概念』（昭和 10 年）や、佐佐木信綱・今井福次郎両氏による『万葉集神事語彙解』（昭和 18 年）といった「万葉集の神観念」研究から半世紀、現代の研究水準から「万葉びとの神観念」を見直すことに本書の目的があった。日本人の精神文化の源流を詞の上から考えようとする当該の研究は、『万葉集』を中心とした古代文献にみえる「神事語彙」に、最新の知見を解説として施した辞典として結実したのである。以下、プロジェクトの経過と本書特色を記す。

2. プロジェクトの経過

計画の初年度には神事語彙に関わる基本的な研究文献をおさえる一方で、『万葉集』を中心とする神事語彙の抽出を行った。その経緯については、拙稿「万葉集における神観念—神事語彙の抽出と分類について—」（『國學院大學日本文化研究所紀要』第 97 輯、平成 18・3）に詳しく記したので参照されたい。

次年度には抽出された神事語彙を分類するとともに、関連する基本文献の収集を行い、あわせて、現地調査も行った。本書に掲載されている写真の多くは、この時に撮影されたものである。

そして、平成 19 年度の末には「監修・辰巳正明、城崎陽子」の名前で各項目の執筆を依頼した。この原稿依頼には執筆の依頼に加え、神事語彙の分析対象が『万葉集』を中心としていることの意義や、広い読者層を想定していることなどが記されていた。

最終年度は依頼した原稿のとりまとめや、校正、編集作業が専らとなった。執筆者からは、原稿が寄せられるとともに、「何をもって『神に関わる』とするか」「神事語としての意義を認めがたい」等、真摯な意見も寄せられた。こうした意見については、書面や、メールのやりとりによって相互理解を促すことを心がけた。また、問題の解決とともに、追加項目の必要性も起こった。これらについては、辰巳・城崎が執筆を分担すると同時に、再度の原稿依頼を行い、辞典のより一層の充実が図られた。編集作業は最終年度の校了直前まで継続され、この作業の多くは國學院大學大学院生の鈴木道代が担った。

3. 本書の特色

本書の研究史的な位置づけははじめにも述べたが、内容の特色の一つとして神事語彙に「枕詞」を多く取り上げたことを上げておかねばならない。枕詞は四音ないし五音一句の修辭であり、下句との関係性の中で機能する。折

口信夫が指摘した、「時を定めてやってくる神が人との間に交わす呪言としての枕詞」という、折口理論による枕詞の発生論が文学研究史上に残されており、この問題は様々な文学理論を生み出す契機ともなっている。

例えば、特定の地名との関係性を持つ枕詞には、枕詞成立の背景として、様々な神話伝承を伴うものが多い。「そらみつ+大和」「かむかぜの+伊勢」「とぶとりの+飛鳥」「うまさけ+三輪」等、これらの枕詞に接続する地名は、「大和」にしても、「伊勢」あるいは「三輪」にしても地名の由来や伝承を語る神話伝承を伴っている。折口信夫は枕詞を地名の「らいふいんできす（生命指標）」であるとする。そして、枕詞を伴った地名が歌などに用いられるとき、これを契機として人々は神の詞を蘇らせることのできることを論じた。こうした折口理論を「神事語彙」という視点から再検討するといった意義も本辞典は持ち合わせているのである。

できあがってみると、その内容が当初の目的に充分合致しているかどうか、不安な点も残る。しかし、斯界の研究者に依頼しての執筆は現行の研究レベルにおいて最高の水準を保ち、かつ、画期的な内容になったのではないかと考えている。

4. おわりに

日本人の精神文化を詞の上から考えていこうとする研究はその緒についたばかりである。内容の中を広げ、時代を広げつつ、日本文化全体を包括する神事語彙の研究は続けられるものと確信している。そして、こうした研究を経ることによって、はじめて「神と人」との関係性における「こころ」の部分が明らかになるのだと考える。

なお、当該のプロジェクトを補足・発展させるために付随して発表された論考を紹介しておく。

辰巳正明『折口信夫—東アジアと日本学の成立—』笠間書院、平成19年

辰巳正明「奈良朝の日嗣と天皇神学」『國學院大學日本文化研究所紀要』第99輯、平成19年

辰巳正明「山上憶良の神事語彙と神道理解」『國學院大學日本文化研究所紀要』第100輯、平成20年

城崎陽子『近世国学と万葉集研究』おうふう 平成21年

最後に、当初の目論見として、当該の成果はWEBサイトによる公開が予定されていた。その成果も近時公開される予定である。関連項目の映像がリンクされるなど、電子媒体ならではの特色を備えたサイトになることが期待される。

(文責 城崎陽子)